

メルボルン大学日本語・日本研究（2000）

メルボルン大学
隈本ヒーリー・順子

（1）機関概要

メルボルン大学は1853年にヴィクトリア州議会で大学設立法案が通過し創設されたが、正式開校となったのは1855年である。1960年代に文学部（Faculty of Arts）の中に東洋研究学科が設けられ中国語講座がまず開かれ、1965年に日本語講座が開講された。同じ頃にヴィクトリア州に二つの新設大学ができ、その一つのモナッシュ大学でも日本研究学科がつくられた。メルボルンとモナッシュ両大学間の協定によりメルボルンが中国語、モナッシュが日本語を優先言語として発展させることが、取り決められた。この方針がくずれたのは、80年代に入り、日本語学習者の数が増加し、日豪関係、特に二国間の経済関係が重視されるようになったからである。

東洋研究学科から東アジア研究学科に改名され、更に80年代にはアラビア語、インドネシア語、人類学を吸収し、アジア言語・人類学科となった。その後、紆余曲折の結果、元のように日本語と中国語だけになり、1993年から Department of Japanese and Chinese という学科になった。しかし、1998年2月1日付けで、この学科は再度、インドネシア語とアラビア語・イスラム研究の2部門を吸収し、新しくMelbourne Institute of Asian Languages and Societies (以下MIALS)が設立された。この新しい組織は、大学中央首脳部の肝いりで誕生し、「アジア」関係の言語・文化研究を強化するという大学の方針のあらわれである。文学部の中に位置しながら、大学全組織から「アジア」関係者を諮問委員会に招き入れ、大局的な観点からこの分野を発展させていくという大学の意欲が伺える。また、この新しい組織の長(Director)として、1998年2月から10月まで副学長が兼任したのも、大学首脳部の意気込みを示している。1998年10月半ばにはオーストラリア国立大学の太平洋・アジア研究所の所長であった人が、MIALSの長として赴任し、現在に至っている。

（2）日本語。日本研究科

MIALSの中で日本語・日本研究はJapanese Programmeと呼ばれ、本年度のスタッフ数は、全部で日本語教員はフルタイム、ハーフタイムが10名と非常勤が5名で構成されている。昨年度より数だけ言えば1名多いのは、昨年末に契約切れの二つのフルタイムのポジションがハーフタイム（50%）に減られ、そのポジションに3名今年から採用されたからである。事実上の人員削減である。

日本研究にたずさわる教師は常勤2名と非常勤1名からなり、専任スタッフの専門分野は日本建築史・美術と人類学である。日本語教師の研究分野は主に言語学・応用言語学である。今年は日本語学習者の数は約450名、日本文化関係のコースを取っている学生は70名ぐらいいるが（学期によって数変動する。）、日本語を取っている（或いは履修した）学生が日本文化も学習している場合が多い。

日本語コースは今まで通り日本語1A/1Bから始まり、日本語6A/6Bまでの6レベルがある。初心者と既習者がそれぞれの能力にあったコースから始められることを意図して、6段階のコースができている。

学生は新学年が始まる前にプレースメント。テストを受け、それぞれの能力にあったレベルに入ることを勧められる。既習者の幅が広くなり、的確に判断するのが難しくなっている。ボーダーラインの

ケースは実際、授業が始まってから2週間以内であればコース変更を大学が認めているので、授業に出てみて決める場合もある。日本語のメイン・ストリームは昨年と変わりなく以下の通りである。

前期	後期
日本語1A Core+日本語1A IT	日本語1B Core+日本語1B IT
日本語2A Core+日本語2A IT	日本語2B Core+日本語2B IT
日本語3A Core+日本語1A IT	日本語3B Core+日本語1B IT
日本語4A	日本語4B+日本語日本語と文化
日本語5A	日本語5B
日本語6A	日本語6B
上級日本語マルチメディアA	上級日本語マルチメディアB

オーストラリアの大学は連邦政府の大学割り当て予算の削減後、ここ数年様々な形で状況に対応してきたが、一番多いのは人減らしである。それから外国語クラスの場合は、一クラスの学生数を増やすやり方である。日本語も例に漏れず少しずつ大きくなり、今では一クラス25人から30人のサイズに膨れ上がっている。数年前までは外国語クラスは一クラス15人ぐらいであったが、今やそれは夢でしかない。今後、教育環境は少しずつ悪化していくことが予想される。

(3) 日本語コース改革

メルボルン大学では、1999年から全大学のコースに統一単位制が導入され、日本語コースもこの単位制の下に再編成され、今年で2年目を迎える。更にすでに述べた予算上の理由で、それまで3年かけてきたレベル1から3までのコースを2年間で履修するよう、カリキュラムの再編成が昨年度からなされ、2001年から開講されることに決定した。今まで各レベル週6時間(12.5ポイントと6.25ポイントのコース)の授業時間数が8時間(25ポイント)に増えるが、それを2年間で教えるわけであるから、全部のコースにかかる授業時間数は三分の一削減となる。3年分の内容を全てカバーするとしたら、これをどのように調整するかが大きな問題である。学生は果たしてまともに日本語が習得できるのかどうか。結果は来年、蓋を開けるのを待つしかない。レベル4以上は現行のままである。

(4) メイン・ストリームの日本語以外のコース

メイン・ストリームの日本語以外に下記のような日本語、日本研究関係のコースがある。

- 日本の大衆文化 (Japanese Popular Culture)
- 現代日本社会 (Contemporary Japanese Society)
- 日本の社会問題 (Social Problems in Japan)
- 日本研究のための方法論 (Research on Japan)
- 上級翻訳プロジェクト (Advanced Translation Project)
- 日本建築 (Dynamics of Japanese Architecture)
- 上級日本語購読-日本経済 (Advanced Reading: Japanese Economic Texts)
- サテライト・テレビから見た日本 (Japan Today by Satellite Television)
- 日本に関する研究プロジェクト (Independent Research Project: Japanese)
- 日本研究の特別セミナー (Special Seminar in Japanese Studies)
- 日本研究優等学位論文 (Japanese Honours Thesis)